

しゃらく互助倶楽部 おかげさまで創業20年

生活支援だより

Vol. 34

2025年12月

こんにちは、生活支援が充実した神戸の安全・安心の身元保証サービス、しゃらく互助倶楽部です。
しゃらく互助倶楽部で提供したサービスを皆さまにお届けします。将来的な問題に備えて皆様の参考になれば幸いです。

活動記

命を救った緊急対応



11月下旬の夕方、会員様のケアマネジャーから「様子を見に行ってほしい」と連絡が入りました。理由を尋ねると、昼の訪問時に違和感を覚えたとのこと。

その際、ケアマネジャーはベッドから車いすへの移乗介助と昼食の支援を行い、食事も普段通り取られたそうです。食後はテレビの前に車いすを移動し、問題なく帰宅したとのことでした。

しかし、何かが気になったのでしょうか。再度電話があり、急ぎ確認に向かうことに。会員様はマンション住まいで、1階にはセキュリティがあります。管理人に事情を説明し中へ入り、玄関前に設置されたキーボックスから鍵を取り出して入室しました。そこには、昼と同じ姿勢でテレビの前に座る会員様の姿が。声をかけても反応は曖昧で、視線も合いません。普段なら冗談を交わす方ですが、その様子はまったくありませんでした。

熱や咳、痛みなどの症状もなく、判断に迷いましたが、代表の小倉が近くにいたため合流。「〇〇さん、小倉ですが分かりますか？」と問いかけても、「え？」と一言のみ。異常を確信し、すぐに119番通報しました。

救急搬送後、総合病院でMRI・CT検査を実施。結果は肺炎に加え、脳梗塞が2ヶ所。さらに熱も上がり、HCU（高度治療室）への緊急入院となりました。いつも快活な会員様も、せん妄の影響か状況を理解できず、自分がなぜ病院にいるのかも分からない様子でした。

もし、あの時訪問していなければ——
命を落としていた可能性があります。
今回の対応で、私たちの役割の重さを改めて痛感しました。

これから寒さが本格化するだけでなく、年末年始を迎えます。お便りを読まれている読者も体調管理には十分に気を付けて頂ければと思います。暖かい家の中と外気の寒暖差は、寒暖差疲労だけでなく脳梗塞・心筋梗塞のリスクが高まります。お体に気を付けて頂ければ幸いです。



緊急搬送される会員様に寄り添い、スタッフ穂積が救急車に同乗する場面

月	火	水	木	金	土・日
					1.2
					亡くなった 会員様の 納骨支援
3	4	5	6	7	8.9
	互助説明 支援(役所手続き)	外出支援(食事)	支援(片付け) 支援(外出支援)	支援(病院付添)	支援(外出)
10	11	12	13	14	15.16
支援(病院付添)	支援(外出支援)	支援(自宅整理)		旅リハ	
17	18	19	20	21	22.23
支援(外出支援) 互助説明	支援(銀行手続き)	支援(自宅整理)	緊急対応 支援・病院付添	支援(病院付添) 支援(病院手続き)	
24	25	26	27	28	29.30
	支援(外出支援) 互助打合せ	支援(外出支援) 互助打合せ説明	互助契約 お便り送付	支援(外出支援)	

認知症と後見人と宗教者

しゃらく互助倶楽部の会員様は、さまざまな人生を歩まれた方々です。その背景も実に多様です。ある会員様はとある宗教を信仰され、元気な頃は教会にもよく足を運ばれていたと伺っています。しかし、認知症が進行すると状況は変わります。宗教者が頻繁に関わろうとし、私たちに対してもさまざまな要求をしてくれました。

「契約書を見せてほしい」「葬儀の依頼を頂いていた」「毎月宗教行事を行う」こうした連絡が時間を問わず入ります。

当初は会員様に確認を取りながら丁寧に対応していましたが、認知症が進み、後見人が選任されると状況はさらに複雑になります。後見人がついた時点で、契約や意思決定は後見人を通じて行う必要があります。ところが、その説明をしても宗教者は納得せず、私たちに高圧的な態度を取るだけでなく、入居施設にまで押しかけ、本人や施設職員に強い口調で接することがありました。

最終的には、会員様ご本人が宗教者に対して「もう二度と来ないでほしい」ときっぱりと断り、その言葉が最後となりました。

この出来事から強く感じたこと——それは、認知症や高齢になると、さまざまな立場の人が関わろうとする場面が増えるという現実です。

会員の皆様も、そうでない方も、こうした問題は決して他人事ではありません。どうか、信頼できる人や制度を味方につけ、安心できる環境を整えていただきたいと思います。

今月の相談 DVから逃げて

先日、DV（親密な関係にある男女間でふるわれる暴力）から逃れている方から相談がありました。その方は、お住まいの市町村から遠く離れた一時保護施設（女性シェルター）で保護されています。

しかし、シェルターに入ったからといって安心できるわけではありません。保護期間には限りがあり、その間に次の住まいを探さなければならないのです。

住み慣れた地域を追われ、ようやく安心を得た矢先に再び移動を迫られる——その不安は計り知れません。「次の場所は本当に安全なのか」「居場所が加害者に知られ、再び襲われるのではないか」私たちには想像もできないほどの恐怖と不安が、その方の心を覆っています。こうした方々を守る制度として、「住民基本台帳事務における支援措置（通称：DV等支援措置）」があります。この制度を利用すれば、住民票などの情報を第三者が閲覧できないようにすることが可能です。

しかし、制度は目に見える安心ではありません。利用していても、恐怖心が消えるわけではないのです。私たちにできること——それは、制度を最大限活用するだけでなく、「守り抜く」という強い意思を示すこと。そして、日常から寄り添い続ける姿勢こそが、その方の心に少しでも安心をもたらすのだと思います。

たくましく生きる我が子

このお便りでも何度かお話ししていますが、私の趣味は登山・キャンプ・釣りです。休みの日で仕事が落ち着いているときは、必ず何かしら予定を入れて自然の中で過ごします。毎年、太刀魚は100匹近く、ブリやメジロも30～40匹ほど釣り上げ、自宅でブリしゃぶや熟成刺身、煮つけなどをふるまいます。そういう意味では、魚料理も趣味の一つかもしれません。

最近、子どもたち（小学6年生と4年生）が「パパと一緒にいきたい！」とせがむようになり、一緒に釣りに出かけています。ただ、二人同時だと釣りにならないので、一人ずつ連れて行くことにしました。

まずは洲本沖で太刀魚釣り。この日は渋い状況でしたが、子どもは6匹釣り上げました。そして翌週、中潮の日に長男とブリ釣りへ。船内22名でわずか3匹しか釣れない厳しい日でしたが、そのうちの1匹を息子が見事に釣り上げてくれました。

思い返せば、私の父は忙しく、父と過ごす時間はほとんどありませんでした。その分、祖父と毎週のように釣りに行き、竿を出して海を見つめる祖父の姿が今でも印象に残っています。祖父が歩くのも難しくなった頃には、私が祖父を連れて釣りに行きました。同じ空間にいてだけで、言葉以上のものを共有できた気がします。

今、船に乗って釣りをする息子も、きっと私が幼い頃に感じたような気持ちで、父親との時間を楽しんでくれているのではないかと——そう思うと、自然の中で過ごす時間がますます大切に感じられます。



年末のご挨拶

本年も、しゃらく互助倶楽部をご支援いただき、誠にありがとうございました。皆様の温かいご理解とご協力のおかげで、私たちは「寄り添う安心」を届ける活動を続けることができました。

今年一年を振り返ると、会員様の暮らしを守るために、スタッフ一同が力を合わせてさまざまな場面で対応してまいりました。

緊急搬送や生活支援、そして孤独を感じる方への寄り添い——どれも簡単なことではありませんが、皆様の笑顔や「ありがとう」の言葉が、私たちの原動力となっています。

来年も、より一層「安心と信頼」をお届けできるよう、制度の活用や地域との連携を強化し、皆様の暮らしを支える取り組みを進めてまいります。

互助の力は、一人ではなく「みんなで支え合う」ことで生まれます。私たちはその輪を広げ、誰もが安心して暮らせる社会を目指します。

寒さが厳しくなる季節です。どうかお体に気を付けて、健やかに新年をお迎えください。

来年も変わらぬご愛顧を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



年末：2025年12月26日（金）15：00まで

年始：2026年1月6日（火）9：00より通常通り営業

しゃらく互助倶楽部 一同

コラム

NPO法人しゃらく設立20周年に寄せてⅣ：代表 妻より

夫の仕事を家の中から見ていると、いつも挑戦の連続でした。

2010年、東日本大震災が起きたときも、震災直後から現地に足を運び、支援の仕組みをつくっていました。その後も何年も、南三陸や石巻に何度も通い続けていた姿を覚えています。

難病の子どもたちを応援する「まさゆめProject」を始め、大学生と一緒に活動したり、熊本地震や能登半島地震のときも、家族に相談する間もなく現地へ飛んでいく…。本当に落ち着く暇がない人です。

それなのに、大学院に進学したり、大学や企業と新しい仕組みをつくったり…。正直、私には理解できないことも多いですが、夫の根っこにはいつも「人を支える」「人を幸せにする」という思いがあるのだと思います。

最近は「ワンニャンProjectを始める」と言い出しました。「また何か始めるの？」と思ったら、もう支援者や企業との連携が進み、後は場所と古民家の選定だけだとか…。その行動力には驚くばかりです。心配もありますが、同時にワクワクもしています。

これからも、困っている誰かに気づき、仕組みをつくり、ゆとりある人生のお手伝いを続ける会社であってほしいと願っています。本当に20周年、おめでとうございます。